

# 砂漠の入り口に位置する先史時代墓地

—オマーン、アッ＝スバイヒ遺跡における緊急発掘調査(2025年)—

黒沼 太一 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教  
 ワリード・アワド・アル＝ギャフリ オマーン国遺産観光省ザーヒラ行政区事務所  
 ジャーベル・アッ＝シェルヤーニ オマーン国遺産観光省ザーヒラ行政区事務所  
 アイシャ・アル＝ヤクービ オマーン国遺産観光省ザーヒラ行政区事務所  
 サーミヤ・アッ＝シャクシ オマーン国遺産観光省ザーヒラ行政区事務所  
 ワリード・ハメド・アル＝ギャフリ オマーン国遺産観光省ザーヒラ行政区事務所  
 シルヴィア・リスキ パリ第1パンテオン・ソルボンヌ大学ジョッセン・サヴィニャック考古学研究所・  
 フランス国立科学研究センター UMR 8167「オリエント・地中海」博士研究員

## Prehistoric Cemeteries at the Entrance of the Desert: Rescue Excavations in July-August 2025 at As-Subaykhi, Sultanate of Oman

Taichi KURONUMA Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, Assistant Professor  
 Waleed Awadh AL-GHAFRI Ministry of Heritage and Tourism, Adh-Dhahirah Office  
 Jaber ASH-SHERYANI Ministry of Heritage and Tourism, Adh-Dhahirah Office  
 Aisha AL-YAQOUBI Ministry of Heritage and Tourism, Adh-Dhahirah Office  
 Samiya ASH-SHAQSI Ministry of Heritage and Tourism, Adh-Dhahirah Office  
 Waleed Hamed AL-GHAFRI Ministry of Heritage and Tourism, Adh-Dhahirah Office  
 Silvia LISCHI Archaeological Research Centre Jaussen & Savignac, University of Paris 1 Panthéon-Sorbonne, and CNRS - UMR 8167 «Orient et Méditerranée», Postdoctoral researcher

### 1. はじめに

アラビア半島南東部のオマーン北部において、先史時代から歴史時代に至る遺跡は主に海岸沿いや2-3000 m級のハジャル山脈山麓部に分布しているが、砂漠においても例外的にアッ＝サファー遺跡など少数が確認されている。2025年7月、オマーン国の国家事業による大規模太陽光発電所の建設が実働段階に入り、内陸部のザーヒラ行政区イブリ市の北西にあるアッ＝スバイヒ西側に広がるルブ・アル＝ハリ砂漠が開発予定地となった(図1)。この開発予定地にはアッ＝スバイヒ遺跡としてオマーン国遺産観光省の目録に登録されている積石塚群があり、7-8月に緊急発掘調査が行われることになった。報告者の黒沼は7月半ばにオマーン国遺産観光省イブリ事務所から本緊急調査の調査隊長を務めるよう要請を受け、7月末に急遽渡航し現地当局職員とともに発掘調査を実施した。この調査で重要な発見があったため、成果を報告する。

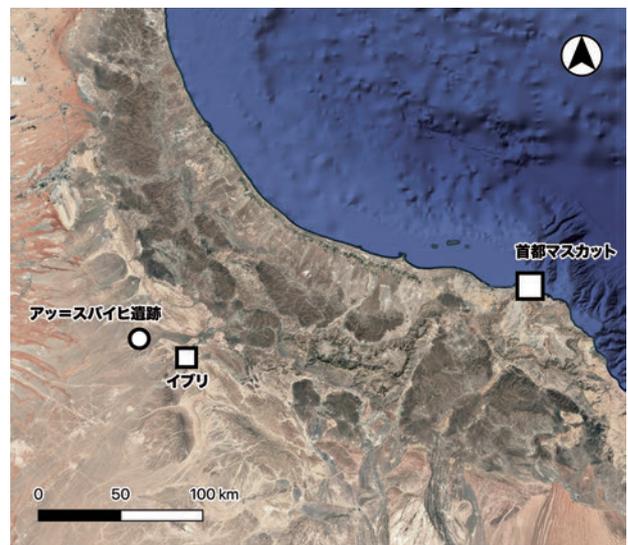


図1 アッ＝スバイヒ遺跡の位置(Google Satellite イメージをもとに QGIS を用いて作成)

### 2. 遺跡の地理的環境と概要

アッ＝スバイヒ遺跡はハジャル山脈山麓部から概ね10-15 kmほど離れたルブ・アル＝ハリ砂漠に位置し

ている。調査範囲の地形は、南北を流れるやや大きめの涸れ川と、その間に分布する高さ3-10m程度の小高い丘からなり、地表面は風成の砂で覆われている。現在の植生は、わずかな数の灌木以外なく、荒涼とした砂漠が広がる。砂の堆積・移動速度は比較的速く、調査中は掘りかけの発掘区に多量の砂が一晩で吹き溜まる条件下にあった。

アッ＝スバイヒ遺跡は50 km<sup>2</sup>以上の範囲に遺構が分散しており、このうち約20.11 km<sup>2</sup>が開発対象となった(図2)。2025年2-3月に実施された予備的な実地確認で、緊急調査の対象範囲外を含め約51基の遺構が南北の地区に分かれて分布していることが把握された。両地区の間には最大幅2 kmほどの沖積地をもつ涸れ川があり、遺構は存在しない。今回の調査後に実施したりモートセンシングによる探査では、400箇所以上の積石塚と思しき地点が見つかり、遺跡の規模はこれまで認識されているよりも大きいと言える。なお2010年代には、近隣に建設された火力発電所へガス管を通すため、経路に重なる複数の積石塚が遺産観光省によって緊急発掘されたが、残っている記録に乏しく調査成果は詳らかではない。アッ＝スバイヒ東方のジャバル・スバイヒの稜線や麓にも先史時代墓地が存在するが、今回の調査対象とは明確に別の遺跡である。

上記の分布状況を踏まえつつ、発掘調査を2025年7月28日から8月26日まで実施した。開発計画の関係で南側から調査に着手し、その後に北側を調査した。

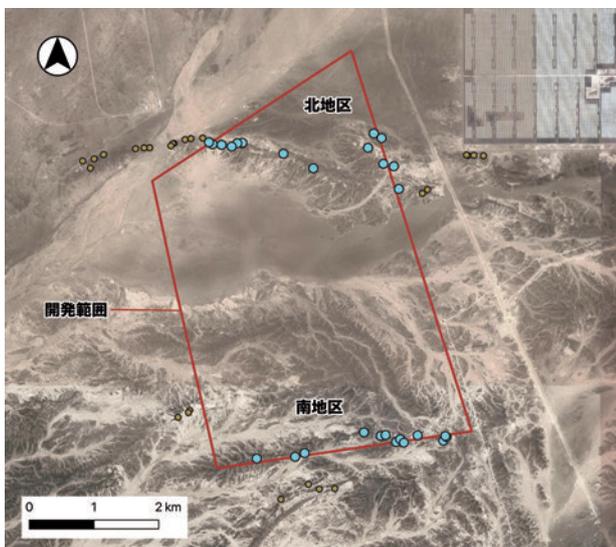


図2 アッ＝スバイヒ遺跡の遺構分布

### 3. 発掘成果

調査では南地区において26基、北地区において34基の遺構を発掘した。この数には事前調査では未確認の遺構や別遺構として分けたものを含んでいる。積石塚や墓に加えて詳細不明な遺構も発掘したが、本報告では重要な考古学的成果が上がった、積石塚や墓の事例を報告する。なお、本稿で言及する遺構番号は2-3月の実地確認で付番したものを継続して使用している。そのため、調査区外の遺構も含めた連番となっている点に注意されたい。

本遺跡で主に見られる積石塚は、円形から楕円形の外形を持ち、楕円形の墓室を持つ。この種類の積石塚については12基を発掘した。この中で遺物が出土した墓は第41号墓および第48号墓のみである。また第47号墓からは、良好な保存状態の遺体が原位置で見られた。

南地区に所在する第41号墓(図3)からは、2点の壺形土器(図4)と9点のビーズが出土した。土器は概ね墓室底面の垂直位置から出土した。1点(41/1)は口縁部に部分的な破損が見られる以外は完形で丸みを持つ形状をしており、もう1点(41/2)は破損した状態で出土したが形態の特徴を捉えることが可能であった。土器41/2は残存する口縁部や頸部、胴部上半の形態の特徴からジェムデット・ナスル系の土器であると言えるが、砂を混和した胎土が使用されており、やや軟質で焼成温度が低いと見られるため、仿製品の可能性がある。近隣のパート遺跡では、ジェムデット・ナスル

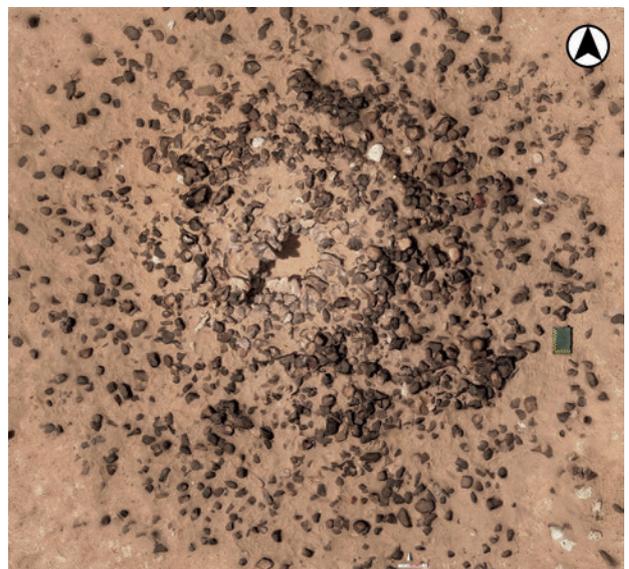


図3 アッ＝スバイヒ遺跡第41号墓



図4 アッ=スパイヒ遺跡第41号墓出土土器(左:土器41/1、右:土器41/2の出土状態)

式土器の在地模倣品が報告されており(Thornton and Ghazal 2016)、特徴が本例と類似する。土器41/1の器形は丸みを帯びており、短い頸部を経て口縁部の頂部は平坦で外に向かって丸みを帯びた口唇部が出る。前3000年前後に南東アラビアで多く出土するジェムデット・ナスル式土器の形態的特徴からはやや逸脱するが、アラブ首長国連邦のジャバル・ハフィート1320号墓で出土したメソポタミア系とされる土器に類似する(Frifelt 1975; Madsen 2015; cf. Méry 2000)。ビーズは1点を除き紅玉髓製であるが、形態的には円筒形・双円錐形からなる。なお本墓からは人骨は出土しなかった。本墓の時期は、出土した土器の特徴から、本墓は前3000年前後、前期青銅器時代ハフィート期(前3300-2700年頃)中頃の所産と見られる。ビーズも前期青銅器時代に一般的な形態的特徴を有しており、土器の時期と整合的である。

同じく南地区に所在する第47号墓からは頭位南西、顔の向き南東、右半身を下とした屈葬状態の遺体1体が出土した(図5)。比較的良好な保存状態だったが、足首・手など一部の部位は欠失していた。頭骨も状態が悪かったが、下顎骨や歯の一部が残存していた。出土人骨は全て取り上げ、細かな骨片についても墓室内の覆土を全て3mm弱メッシュで篩がけして回収した。

第47号墓の近隣にある第48号墓(図6)は今回発掘した中で最も重要な墓となる。本積石塚はやや大型で、墓室は長めの楕円形を呈するが、第41号墓と同じ構造的特徴を持つ。墓室内からは完形のジェムデット・ナスル式土器(48/1)1点が墓室床面の直上からやや傾いた状態で出土した(図7)。口唇部にわずかな欠けが見られるが、そのほかは完形であった。人工遺物以外にはわずかな骨片が検出されたに留まる。土器の特徴から、本墓も前3000年前後のハフィート期中頃が推定される。さらに本墓の特筆すべき点は、墓本体の周り



図5 アッ=スパイヒ遺跡第47号墓出土土人骨



図6 アッ=スパイヒ遺跡第48号墓主体部および列状遺構(発掘前)



図7 アッ=スパイヒ遺跡第48号墓出土土器(48/1)

で検出された付属遺構である。各付属遺構は円形・楕円形であり、本墓を挟んで北東側および南西側に概ね一列になるようにして検出された。数としては北東側

で3基、南西側で11基が列状に配列されており、さらに4基が南西端からやや南東側に外れた部分にまとまって確認された。列状に遺構が付属する積石塚は、サウジアラビア中部や南部、南アラビアに含まれるオマーン南部のドファール地方やイエメンに分布するが、本事例は南東アラビアで初めての発見例となる。南アラビアでの事例は青銅器時代に時期づけられる以外に詳細な年代が詳らかでないことが多いが、本積石塚はジェムデット・ナスル式土器が出土したため前3000年前後の時期である可能性があり、同様の特徴を持つ南アラビアにおける遺構の時期を類推可能な資料を提供できる可能性をもたらす、重要な発見となった。なお発掘調査終了後、列状付属遺構を伴う積石塚をさらに1基、今回の開発範囲の外にて発見した。この墓は本体の積石塚がより大きく、列状遺構の長さも概ね50mに及び、遺産観光省イブリ事務所により発見後速やかに保護指定された。

墓室構造が積石塚に類似するものの明確な積石がない墓も4基発掘した。北地区の第8号墓からは頭骨および胴体上半の人骨が原位置で、長骨などが原位置以外から出土した。頭位西で右半身を下にした恐らく屈葬状態の遺体1体とみられる。頭骨の保存状態は比較的良好であった。副葬品は確認できなかった。南地区の第51a号墓からも頭骨を伴う人骨少なくとも1体分が解剖学的原位置を保たない状態で検出された。北地区の第15号墓からはビーズが13点出土した。ビーズは紅玉髓製・恐らく凍石製などだが、海産貝製も2点出土した。うち1点はヤカドツノガイ (*Dentalium octangulatum*) を加工しており、石製ビーズに挿入された状態で出土している。石製ビーズの形態は主に円筒形・双円錐形である。なおヤカドツノガイを切断して作ったビーズは、第51b号墓からも1点出土している。第51b号墓からは、ほかの遺物・人骨は発見されなかった。

#### 4. まとめ

アッ=スバイヒ遺跡の調査では、南東アラビアの前

期青銅器時代ハフィート期の研究に新たな知見を加え得る重要な発見を得られた。ただ本調査で発掘した積石塚は、ハフィート期の一般的な墓とは型式的特徴を異にしている。発掘した積石塚における埋葬の時期をより確かなものとするため、出土人骨を計測・記録した後にバイオapatiteによる年代測定を試みるとともに、完形土器内部から採取した光ルミネッセンス年代測定試料を分析し、土器の埋没年代を推定する予定である。

#### 5. 謝辞

本調査はオマーン国遺産観光省許可・行政的支援のもと、開発業者であるナマ電力・水供給会社 (Nama Power & Water Procurement Company) からの調査資金拠出により実施された。本稿著者に加え、調査にはアフメド・アル=ハトミ氏、アライヤ・アル=アブリ氏、アンマール・アル=カルバーニ氏、シャハード・アル=ハンバシ氏、シャハード・アン=ナービ氏、ハイサム・アッ=シャクシ氏が補佐員として参加し、そのほか15名の作業員とともに調査を進めた。また田邊幹太郎氏からは技術的な教示を受けた。関係各機関・諸氏に記して御礼を申し上げます。

#### ■参考文献

- ・ Frifelt, K. 1975 A possibly link between the Jemdet Nasr and the Umm an-Nar graves of Oman. *The Journal of Oman Studies* 2: 57-80.
- ・ Madsen, B. 2015 *The Early Bronze Age Tombs of Jebel Hafit*. Aarhus, Aarhus University Press.
- ・ Méry, S. 2000 *Les céramiques d'Oman et l'Asie Moyenne. Une archéologie des échanges à l'Âge du Bronze*. Paris, CNRS Éditions.
- ・ Thornton, C. and R. O. Ghazal 2016 Typological and chronological consideration of the ceramics at Bat, Oman. In C. P. Thornton, C. M. Cable and G. L. Possehl (eds), *The Bronze Age Towers of Bat, Sultanate of Oman. Research by the Bat Archaeological Project 2007-12*, 179-216. Philadelphia [PA], The University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology.